

氏 名 柏木 善治

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1573 号

学位授与の日付 平成25年3月22日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 埋葬技法からみた古代死生観  
—6～8世紀の相模・南武蔵地域を中心として—

論文審査委員 主 査 教授 仁藤 敦史  
教授 廣瀬 和雄  
准教授 上野 祥史  
教授 池上 悟 立正大学  
准教授 田中 裕 茨城大学

## 論文内容の要旨

本論文は、六世紀から八世紀の相模・南武蔵地域の横穴墓を主たる検討対象とし、考古学による埋葬技法の分析を中心に、文献や民俗の事例を参照し、多角的に古代死生観を分析したものである。従来不明確であった、精神的世界を考古学の立場から実証的に明らかにしようと試みており、意欲的な課題設定および研究方法が評価される。

本文は三章から構成され、「研究史」を扱う第一章、相模・南武蔵地域の古墳群の動向、とりわけ横穴墓を詳細に検討した第二章「後・終末期の墓制」、および送葬観念を埋葬方法や土器組成などから分析した第三章「後・終末期の喪葬観念」と全体の「まとめ」からなっている。

第一章「研究史」では、改葬や人骨配置、被葬者像、喪葬儀礼、霊魂観などについて、四時期に分けて整理し、発掘事例の増加を踏まえた総合化・体系化の必要性を論じる。そのうえで相模・南武蔵地域を検討対象として選択した理由として、人骨や線刻画が豊富に検出され、墓前域の状況を掴みやすいこと、などを指摘する。

第二章「後・終末期の墓制」では、第一節「古墳の諸相」でまず「中核的墳墓群」と見なされる三ノ宮古墳群の分析をおこない、さらに首長層に採用された八角墳や上円下方墳からは、「見せる墳墓」としての視覚的効果(段築成・墳丘高)を指摘する。とりわけ、畿内古墳とは異なる埋め戻さない開放された墓前域の存在は、古墳だけでなく横穴墓にも共通し、儀礼空間として機能したと論じる。小石室や石組施設を使った埋葬や改葬は、首長墓とそれ以外の古墳でも行われ、共通の埋葬理念の存在を指摘する。

第二節「横穴墓の諸相」は、撥形横穴墓に注目し、新進型と複合型という二つのパターンを指摘する。その形態は、追葬の発達に伴う、羨道の機能喪失により生じ、被葬者層の拡大という埋葬人数増加への対応策と解釈する。

第三節「横穴墓の階層性」は、継承儀礼に用いられたと推定される装飾大刀など優品の偏在性から横穴墓の階層性を指摘し、首長墳を凌駕するようなこれら横穴墓は、水田可耕地の少ない太平洋岸に多く分布することから、海道を掌握した海民という被葬者像を想定し、さらに文献記載からは東アジア情勢の緊迫による兵站物資の輸送管掌的性格があったと位置付ける。

つぎに第三章「後・終末期の喪葬観念」では、第一節「埋葬位置とその様相」で、墳墓における埋葬方法を分類し、改葬は伸展葬に比較して、遺体への執着観念が厚かったと想定し、これは遺骸の不浄化を避ける意識と関係すると論じる。改葬は、被葬者層の拡大により拡大し、各地域的にも普遍的な葬法となる。

第二節「線刻画からみた死生観」では、矢をつがえた弓を埋葬施設に描いて、邪の侵入から魂が不浄なモノへ変化することを避けるだけでなく、喪葬に関して黄泉の国への道程を記すという、具象化した観念を独自に表現していたとする。

第三節「土器儀礼と墓前域」では、玄室と墓前域という土器の使用場所と器種による組成から段階を設定する。喪葬儀礼に用いられた土器の種類と組成の分析により、玄室での小型供膳具から大型の甕が墓前域で使用されるようになり、玄室では高台付坏などが多用されると述べる。さらに七世紀中葉以降、流通網整備と連動し、須恵器大甕・フラスコ型長頸瓶などの破碎や打ち欠き儀礼など、器種と行為の共通化が図られたとする。玄室から

墓前域への拡大、供膳具として食器から貯蔵具への変化、骨化を確認する玄室での灯火行為の発生、墓前域での大型甕の破碎行為などの画期が指摘される。さらに、墓前域の拡大は多くの人を対象にした喪葬儀礼が発達したこと、石積による視角的効果は、古墳と横穴墓に共通するようになることは、両者の社会的立場が共通するようになったことを前提とした儀礼であると想定する。

第四節「文字資料からみた死生観」では、文献にみえる死生観の記述を分析し、殯などの喪葬儀礼や黄泉国のイメージ、魂鎮め、薄葬思想などを指摘し、そこには古墳時代後・終末期の現象が読み取れるとする。とりわけ仏教説話集である『日本霊異記』には、火葬導入以後の仏教的死生観の完成に至る過渡期的な冥界観念が記述されるとする。

第四章「まとめ」では、全体を総括して、死の認識段階として「機能停止」「死の認識」「肉体消滅」の三段階を設定する。そして第一段階と第二段階の間は、生と死の過渡期で死の確認行為としての殯がおこなわれ、第二段階と第三段階の間には肉体と魂の分離(骨化)により、清浄(畏怖)・不浄(忌避)という魂の変化がおけるとされる。

古墳時代後・終末期の相模・南武蔵地域における、改葬と灯火行為などは肉体消滅を確認する開放的な死生観を反映し、描画による辟邪や黄泉の国のイメージは、魂の清浄な変化を望む行為であり、横穴式石室と横穴墓に共通してみられる墓前域の拡大や破碎行為は社会に開かれた喪葬儀礼と解釈し、他地域の伝統的な密閉的の死生観とは区別する。

本論文は、従来不明確であった精神的世界を、考古学の立場から実証的に明らかにしようとしており、意欲的な課題設定がなされる。古墳時代後期・終末期を中心に喪葬観念を、主として横穴墓における改葬行為や線刻画などの分析により試みようとした分析視角は妥当であり、評価される。具体的には、開放された墓前域の存在や喪葬に用いられたと判断される土器の出土状況などから、当該地域における古墳と横穴墓に共通する喪葬観念の存在を指摘した点、撥形横穴墓が、被葬者層の拡大という埋葬人数増加への対応策として発生し、追葬の発達に伴う、羨道の機能喪失により生じたと解釈する点、首長墳を凌駕するような横穴墓グループに対して、兵站物資の輸送管掌者的性格を想定した点、七世紀中葉以降、流通網整備と連動し、須恵器大甕・フラスコ形長頸瓶などの破碎や打ち欠き儀礼など、器種と行為の共通化が図られたことを指摘した点、相模・南武蔵の横穴墓にみられる線刻画と文献の記述から死生観を分析した点、などが本論文における独自性として評価される。全体としては、古代の一時期における埋葬行為の具体的な姿が、特定地域の実態として克明に把握され、より可視化された点が本論文の特色である。

しかしながら、改善すべき点も少なくない。まず、全体として用語・表記・概念などの不統一が一部に存在することが指摘された。また、研究史整理については、年代と地域を限定した意味を説明し、普遍性と特殊性を指摘することや、個々の論考への自身の論文との「緊張関係」をもったコメントがもう少し必要と思われる。

考古学の立場からは、第一に横穴墓単独の分析だけでなく、単位群としての分析がない点、第二に改葬の問題において取り出された遺骸の事例などが十分に分析されていない点、第三には、個々の考古事象による分析から、社会背景の説明などの総合化の過程でいくつかの課題を残している点、などが指摘された。

また文献史の立場からも、『靈異記』の他界観は、殯による黄泉がえりと火葬による骨化の習俗が混在するなど、過渡期的であり、後期・終末期古墳との対比による単純な二項対立的解釈とするのは問題があり、『靈異記』の仏教的他界観と前代的要素との明確な分離が求められること、また概念としての「首長霊」「カミ」「魂魄」の定義などは学問分野ごとに異なり、概念整理が必要であり、基礎的概念についての学際的研究史の検討や、中国史料の原典にさかのぼった検討が必要であること、とりわけ魂魄観念の成立が意外に中国でも遅いこと、天皇霊が現天皇の威力として多く語られている点、などについての説明が要るとの指摘があった。

以上の問題点を考慮しても、本論文の評価は高く、委員全員の一致した結論として、博士(文学)の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。